

文化

音楽

伊藤恵ピアノ・リサイタル

情感おさえた 万華鏡の音色



均衡の取れたシューマンを聴かせる
伊藤恵＝神戸新聞松方ホールで

伊藤恵が得意とするシューマンのピアノ曲連続演奏会の第1回プログラムは、「アベッグ変奏曲」「ピアノ・ソナタ第3番」「交響的練習曲」(3月25日、神戸新聞松方ホール)。

シューマンの初期ピアノ曲のほぼすべては、恋人クララ(後の妻)へあてた「私信」だ。それは本来、舞台上でにぎにぎし

く朗読する類のものではないし、まして作品の私的感情への過剰な思い入れや自己投影は、聴く者を赤面させるだけだろう。

こういう音楽は、物静かで親密な女性の声音で聴くのがいい。ふと手にとったメルヘンの一節をさりげなく口に出してみるときのような、あるいはセピア色になってしまったかつての恋人からの手紙を、思い出深くもさりげない微笑とともに読み返すときのような、抑制された情愛を込めて。伊藤のシューマンの素晴らしさは何より、共感と距離との絶妙な均衡にある。

伊藤はシューマンをショパンやリストとは根本的に違った、あくまでドイツ的内面的な音楽として演奏する。「ピアノ・ソ

ナタ第3番」など、ほとんどブラームスの先駆のようだ。もちろんヴィルトウオーソ的なきらびやかさに欠けるわけではない。しかしそれはあくまで青春の華やきの一コマという節度を越えることなく、決して大向こうの観客を唸らせるためのシヨリの力技に転落しはしない。

同様に印象深いのが、一つ一つの音の残響に対する、無限のいつくしみとでも言うべきものである。とりわけ高音部で奏でられる旋律において、個々の音が名残惜しげにいつまでも余韻を響かせ、絡み合い、色とりどりのアラベスク模様を織り成すのだ。例えば「アベッグ変奏曲」冒頭など、右手のオクターヴ・ユニゾンで同時に弾かれる二つの音が、まるで二つの水滴のように互いが互いの色を反映しあって、万華鏡をのぞくような体験であった。

なお当夜のリサイタルのうち、ほとんど唯一「交響的練習曲」のフィナーレだけは少々テンポが走り気味で、この曲に限らずシューマン作品がしばしば演奏者を誘い込んでしまうところの「過剰没入」のきらいがあったが、これは曲の性格からしてやむをえないところであったかもしれない。

(岡田暁生・音楽学者)